The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛星高校で授業したよなあ ：〈老いる〉を哲学する
Author(s)	西川, 勝
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 23-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星高校で授業したよなあ
＜老いる＞を哲学する

西川　勝

何とも情けないタイトルだが、ほんとのことなので仕方あるまい。手帳を調べると、平成１７年１１月５日（土）９：５０から１１：００、洛星高校授業。年間テーマ「身体」、担当授業テーマ「＜老いる＞を哲学する」と記入してある。同行してくれる臨床哲学院生の樫本さんと、阪急電車の西院駅で９時に待ち合わせとある。確かに、ぼくは洛星高校で授業をした。それは覚えている。西院の駅に着いたとたんに、タバコを買いに走った自動販売機。モーニングセットを注文した高校前の喫茶店。授業の帰りに市バスに乗って出かけた百万遍の古本市。古本探しをした後で樫本さんと食べたハンバーグ定食。アルバムを見るように思い出せる。なのに、その日一番大切な用事だったはずの授業の、その内容を思い出そうとすると、ずいぶん怪しい。

ぼくは怠け者で、人前で話をするときにもあまり準備をしない。レジュメなどの資料を作ることも少ない。不安をいっぱい抱えてそのときがくるのを待ち、開き直って直前に仕上げたメモを持って人前に立つというのが悪癖になっている。メモは話が済んだらどこかにやってしまうので、探しようがない。メチエに洛星高校でした授業について書くように頼まれたころには、ぼくの記憶の表面には何人かの洛星高校の生徒の顔がおぼろげに残っているだけの始末だった。

で、困った僕を助けてくれたのが、樫本さんが書いた授業報告のメールである。次に引用する。

> みなさま
> Ｄ１の樫本です。
> 先週の土曜日（５日）に行ってきた洛星で
> の授業報告です。
> 授業は西川さんに担当して頂きました。
> テーマ：「老いる」を哲学する
> 生徒：１３人

> まず、『ソポクレス』からスフィンクスの
> 謎とオイディプスの謎解きの一説、『関寺
> 小町』から１００才になった小野小町が老
> いを感じ始めた自分を振り返っている一
> 説、そして西川さん自身の認知症の人にか
> かわる介護の経験を紹介してもらったの
> ち、「老いる」からイメージすることにつ
> いて話あいました。

> 発言としては「成長しなくなること」「限
> 界を感じること」「できなくなること」な
> ど老いについてのマイナスの側面や、「経
> 験を積み重ねる」「納得していくこと」と

> いっ > たプラスの側面についてなど、「成
> 熟」「成長」をキーワードに「老い」の意
> 味についての発言が多かったように思いま
> す。また、今の社会が、ある面で「成熟」（完
> 成形）からの距離で、子供から大人へ、大
> 人から老人へという過程が計られているこ
> とについてどう思うか、という問いかけに
> 関する発言も出されました。

> こちら側の意図としては、「ここからが老
> いなんです」といった区切りはなく、結構
> 身近なものなのでは？ということがわかっ
> てもらえるかなと思っていたのですが、や
> はりあまりそういう実感はなさそうでし
> た。１６才の生徒が「そういえば昔は選択
> 肢が多かったなあ」なんて言っている姿は
.> ちょっとほほえましかったですが。

> 授業を終えた感想です。
> 今回は、１３人ということもあり西川さん
> を含め教室中央に集まってもらいました。
> そのため、普段よりもかなり集中して授業
> に参加していたように思いました。ただ、
> テーマが大きかったために議論の深まりと
> いう点では不満がのこっているようでし
> た。（僕自身は、西川さんはいろいろな生
> 徒に目配りし、うまくすすんでいたのでい
> い授業だったと思います）ただ、単に知識
> としての情報がほしい生徒と議論したい生
> 徒との温度差は気になりました。

> ある生徒が授業後、「なぜもっと発言しな
> いんだ！あんなすくない発言で授業がふか
> まるわけないだろ！なぜ先生だけとのやり
> とりになるんだ！なんで生徒で議論できな
> いんだ！」何人かの友人に叱咤していた光
> 景が印象的でした。この点は、この洛星の
> 授業では常にわれわれの念頭にあるところ
> なので、最後の授業で行う、われわれと生
> 徒たちとの話し合いのなかで、すこしでも
> フォローしたいとおもっています。コー
> ディネーターのみなさま、この点ちゃんと
> 準備しましょうね。ちょい焦り気味ではあ
> ります。

> 以上で報告をおわります。西川さん、あり
> がとうございました。

このメールを手がかりに、いくつかを思い出そう。

まず、ソポクレスの書いたギリシャ悲劇『オイディプス王』（福田恆存訳、新潮文庫）からの引用である。スフィンクスが旅人に対して謎をかけ、答えられないと相手を殺してしまったという恐ろしい話だが、これを見事に解き明かしたオイディプスは、栄光と悲惨の道を歩み始めることになる。

「スフィンクスの謎」

地の上に住まい、脚は二つ、四つ、三つと

変化はすれど、ただ声は変わることなく

そして見よ！

地に蠢き、空を飛び、海を泳ぐもの、

在りと在る生き物のうち、

かほどその姿、力を変えるもの、他に無く、

その脚の最も多きに頼りて歩む時、

そは遅々として進まず、全く力なきが如し。

「オイディプスの答え」

汝の意に背きて答えん、

暗き翼の殺戮者ミューズよ、

聞け、汝の罪に最後をもたらす言葉を、

汝の謎、そは人間なり、この世に生を受けし時、

母の胎内より出でし赤子は四つの手脚をもて這い、

やがて寄る年波の重荷には堪え切れず、

背はかがみ、杖をもちて第三の足となす。

スフィンクスが旅人に投げかけた謎は、すなわち旅人がそれであるところの人間自身に関する問いであった。自らの謎を解き明かせぬ者は、たとえ生きてはいても死んでいるのも同然。スフィンクスに食い裂かれなくとも自覚的な人間としては死んでいるのであった。しかし、その謎を解き明かしたオイディプスも、人間が移ろい行くものであることの自覚は、自らを悲惨へ導く道に続く扉を開けたに過ぎなかった。子供だましのような謎に仕組まれた解決不能な罠がある。と、ここまでの話はしたかしなかったかは覚えていない。ただ、この謎解きの話から、人間を考える際に完成された成人のイメージではなく、赤子から老人までを旅する途上の者として考えてほしいということを伝えたつもりである。

高校生にしては教養のありそうな生徒たちの何人かは、お決まりの話だなといった顔をして聞いているのがわかった。これはまずい。生徒に先を読まれるようでは授業にならない。ぼくは焦ってきた。少し意地悪をしてみようという気分になり、最初は板書するつ

もりであった能「関寺小町」の一節を読み上げるだけにした。鷲田先生が著書『老いの空白』で取り上げていた多田富雄さんの文章からの引用である。

ぼくは、「関寺小町」について、たぐいまれな美女才女と謳われた小野小町が百歳あまりの老女となって、関寺の鐘の音、それは諸行無常の響きがっったというが、年老いた耳にはそれさえ聞こえなくなってしまった場面で、小町が自らの老残の姿に嘆息するせりふとして紹介した。

「また故事(ふるごと)になりゆく身の、せめていまはまた、初めの老いぞ恋しき」

生徒たちの眼が、きらっと輝く。簡単にわからない方がやる気になるらしい。

ぼくは、このせりふについて、こんな風に説明したと思う。自分が老けたなと感じることには一種の哀切が伴うものだが、人が自らの老いに直面するのは一度きりではすまされない。あれほどつらかった「初めの老い」でさえ、恋しく焦がれるように思い出すという老いが次々に押し寄せてくる。老いの中にもさらなる老いが待ち受けて、人は安らぐことがない。

老いを意識し始めると際限のない落胆へと老い込められる。

ぼくは、この老いの意識と平衡するように、若さのなかにも未熟であることへの苛立ちと焦りが出口の見えないループにあるのではないかと考えていた。

そこで、生徒たちに議論を仕掛けたはずだが詳細を思い出せない。生徒たちの発言は、しっかりと考えられたものが多く、ぼくのほうがタジタジになってしまい授業をリードするなどということはできなかった。その自信のなさが、かえってぼくの口数を増やしたのだろう。授業の後で、生徒同士の議論が不十分だったという指摘があり、その批判の鋭いことに感心した。という感じで、ぼくが自慢げに思い出せることは少ない。すてきな高校生諸君よ。ちょっと、おじさんは都合よく忘れさせていただくよ。

（にしかわまさる）